第２回研究会

日本におけるフットパス

「日本フットパス協会」理事
神谷　由紀子

１．注目される日本のフットパス

フットパス（footpath）とは、イギリスを発祥とする“森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径（こみち）【Path】”のことであり、ひいてはこのみちを歩くことの総称と「日本フットパス協会」では定義づけている。

もともとはイギリスが発祥地であるが、最近日本でもフットパスへの関心が年々高まっている。協会でも特にこの１年は各地からの問い合わせが急増しており、北海道や九州などでは広域ネットワークも形成されつつある。今フットパスがこのように高い関心を呼んでいるのは、日本のフットパスがただ単に健康維持や環境保全のために歩くという域を超えて、観光やまちづくりの画期的な活性化策として注目されているからである。町田市、甲州市、山形県長井市、北海道黒松内町、熊本県美里町、茨城県行方市などなどフットパスを導入した地域では成功を実感している。

２．フットパスのノウハウと効果

フットパスが活性化をもたらすことができるノウハウはそのみちづくりにある。従来の観光のように名所旧跡を繋いでコースにするのではなく、自分の住んでいる周辺で、感性に訴える心象風景や小さな歴史など地域の魅力を浮き彫りにする“いいみち”を選び出し、コースにして歩いてもらうのである。感情移入のできる“いいみち”つくりはその魅力に惹かれた多くのファンを地域に引き寄せ、地元に地域の魅力と誇りを再認識させ、地域一体となって地域自身の魅力づくりやおもてなしに取り組むシステムを作り出した。換言すれば、フットパスは①まちづくりの資源を発見し、②ファンをつくり、③共同体を再生させ、④地域の様々な属性の人々の交流と合意形成を基盤としたプラットフォームを形成し、⑤経済効果をもたらすことができるのである。

３．なぜ今フットパスなのか

フットパスの特性は以下の３点にあると考えられる。

① **まちづくりに必要なほとんどの要素を含む**―フットパスをつくるだけの簡単な作業であるにもかかわらず、その過程で上記に掲げた地方自治の原点ともいうべきまちづくりに必須な効果をすべて享受することになるので、ノウハウさえ把握できればフットパスをつく

ることが活性化に繋がることとなる。

② **どんな地域でもできる**—フットパスは、資源がなくとも、資金がなくとも、どんなまちでも作ることができる。一見資源がなさそうに見える地域でも見方を変えれば、つまり感性を伴って見れば、そのまちのオンリーワンの魅力が浮き彫りとなってくる。自治体の大小や都市部や過疎部は関係ない。むしろ“里山”など優れた原風景の残る過疎地には資源が豊富に発見できる。どのようなまちにもフットパスをつくることができ、それによって活性化することができるということになる。

③ **現時代の象徴である**—イギリスではフットパスは産業革命の後に労働者たちが、貴族に囲い込まれてしまった国土を「せめて歩かせてほしい」と運動をおこし、その結果勝ち得た法的な「歩く権利」であった。住宅、食物、環境に対する様々な人間性回復を希求した運動の１つがフットパスであったのである。フットパスは脱工業化社会の社会現象であった。日本でもフットパスはバブル経済が崩壊した1990年代後半に現れた。フットパスはそれまで経済一辺倒であった日本人の価値観が大きく変動し、日本が新しい社会に移行したという象徴と言えるであろう。

観光面でも、フットパスは新たな時代の「観光」として期待されている。日本交通公社『観光文化』の外川宇八編集長は「フットパスは観光の諸課題を解決し、今後の着地型観光の王道となるべき可能性を秘めている」[※1]と書いてくださった。復興支援や東京オリンピックを見据えると、フットパスがこれからの観光の主流となっても不思議はないであろう。

４．フットパスによって活性化したまち

フットパスがまちづくりや観光の活性化に期待されているのは日本ばかりではない。実は本家のイギリスでも最近、その経済効果、そしてまちづくりの効果に対してここ数年とみにその実績が認められている。龍谷大学里山学研究センターでも講演のあったシーラ・タルボット氏は国家機関ナチュラルイングランドの職員であると共にコッツウォルズ地方ウィンチコム町のフットパス活動“Walkers are Welcome Town”（WaW）の代表者である。WaWは歩く人をまち全体で支援する活動で、英国全土で起動して３年で100自治体に拡大している。ウィンチコムでは年に一度５月下旬に３日間、まちをあげて全国ならぬ全世界からのウォーカーズを受け入れる。様々なグレードのウォーク、17コースが作られ、ガイドがついて、美しい景観の中を歩いたりパブで食事をとったりすることができる。この活動の成果として以前は９店しか開店していなかった店舗が、常時全店開業できるまでに活性化したという。

イギリスではフットパスを繋いでできている15のナショナル・トレイルから年間8,000億円の売上、24万人の正規雇用という経済効果が出ているという[※2]。町田市でも長年の活動の成果によって「日本フットパス協会」が設立した2009年度の観光客数等実態調査によると観光客数は350万人、実績は９億円、リピーター率81.7％という数字が出ている[※3]。小野路にある「里山交流館」はフットパスコースを歩く客を対象としたビジターセンターとして町田市が元名主屋敷を購入したもので、多いときには１日400人もの集客を行っている。

地に足の着いたまちづくりが新しい社会で進行しつつある。

※1　『観光文化』特集号「広がれ日本のフットパス」(2010.1.20第199号)
※2　ランブラーズ協会　報告書“Walking facts and figures 1: The benefits of walking”
※3　「2009年度町田市観光客数等実態調査報告書」町田市経済観光部産業観光課